

一 別紙の文章を読んで、次の問いに答えなさい。

受験番号

問一 線①「」にあてはまる、ひらがな三字を書きなさい。

問二 A B Cには、次のア〜カのどれかが入ります。それぞれに最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

- ア 照らそう照らそう    イ 燃えよう燃えよう    ウ かわかそうかわかそう
- エ 焼こう焼こう    オ 広がろう広がろう    カ のぼろうのぼろう

問三 線②「なぜそう平らだかとならば」の「平らだかとならば」の部分の、わかりやすく書き直しなさい。

問四 線③「だから仕方ない」という表現をくり返すアラムハラドの説明として最もふさわしいものを次の1〜4から選び、記号で答えなさい。

- 1 本当のことを早く理解してほしいと、子供たちをせかしている。
- 2 かえられないことはあきらめるしかないのだと、子供たちをさとしている。
- 3 これはどうにもかえられない絶対のことだと、子供たちに伝えている。
- 4 やれやれどうしたものかと困って、子供たちにたずねている。

問五 線④「一つのふるえる点のようだ」・⑤「雨が降っているようだ」は、それぞれどんなようすを表しているか、答えなさい。

問六 アラムハラドが子供たちに「火」「水」「鳥」の話をしたことについて、

- (1) この三つに共通するのはどういうことですか。答えなさい。
- (2) アラムハラドはどのような目的でこれらの話をしたのですか。答えなさい。

問七 線⑥「人は歩いたり物を言ったりいたします」というタルラの答えを、アラムハラドは良い答えだと受け止めて、話を進めていきます。この答えをなぜ良いと認めたのか、説明しなさい。

問八 線⑦「獅子のように」の比喩は、タルラのどんなようすを表していますか。解答らん「」にあてはまるように答えなさい。

問九 線⑧「アラムハラドはあぶなく涙をながしそうになりました」とありますが、それはなぜですか。説明しなさい。

問十 線⑨「歩くことよりも物を言うことよりもっとしなないでいられないこと」と同じことを言っている別の表現を文中から二〇字以内でぬき出し、はじめと終わりの三字を書きなさい。

問十一 線⑩「ほかの人たちはどうだ」とありますが、

- (1) ブランダとセララバアドが「しなないでいられないこと」として答えたことを書きなさい。
- (2) アラムハラドは二人の答えをそれぞれどのように受け止めましたか。アラムハラドの反応に注意しながら説明しなさい。
- (3) この二人の答えをふまえて、アラムハラドは子供たちに結局どのようなことを伝えていきますか。わかりやすく答えなさい。

問十二 この文章の作者は宮澤賢治です。

- (1) この作者の作品名を一つ答えなさい。
- (2) 次の中から、作者と関係が深いものを三つ選び、記号で答えなさい。

- |          |          |           |
|----------|----------|-----------|
| ア 岩手県    | イ 秋田県    | ウ 宮城県     |
| エ イルクーツク | オ イーハトープ | カ イスラマバード |
| キ 工業     | ク 農業     | ケ 漁業      |

二 次の(1)〜(3)は、四字熟語を文に直したものです。【例】にならって、もとの四字熟語を答えなさい。(文は一部ひらがなに直してあります。)

【例】名ありて実なし。 ↓

有名無実

- (1) 故きをあたためて新しきを知る。 ↓
- (2) 口をことにし、音を同じくす。 ↓
- (3) 意を用いること、周くいたる。 ↓

三 次の文中の 線部を漢字で書きなさい。

- (1) 身をコにして働く。
- (2) じょうだんをマに受ける。
- (3) 王をゴエイする兵士たち。
- (4) 主人にジュウジュンな犬。
- (5) ガイトウに立って演説する。

四 次の漢字の 部は何画目にあたりますか。算用数字(1, 2, …)で答えなさい。

- (1) 慣 (2) 物 (3) 帯 (4) 希

五 花子さんが入院し、先生がお見舞いに来ました。そこでの会話について、あとの問いに答えなさい。

先生 「野原花子さんの病室はどこですか。」

受付 「どうぞ二階のナース・ステーションで1うかがってください。」

(病室にて)

先生 「花子さん、こんにちは。お見舞いに来ましたよ。」

花子 「ありがとうございます。先生、母からの手紙を2拝見しましたか。」

先生 「はい。まだしばらく入院するそうですね。お医者さまの3申されることをよく聞いて、ゆっくり休んでください。」

……(中略)……

先生 「では、これで帰ります。お母さまにもよろしくね。」

花子 「はい。元気になったら登校いたしますので、クラスのみんなにもよろしくお伝えしてください。登校する前に、また母が5お知らせになると思います。」

問一 右の 線1〜5の敬語が正しければ○を、まちがっていれば正しい敬語表現を書きなさい。

問二 退院後登校したときに、花子さんは先生に対してどのようなあいさつをすれば良いか、「先生、おはようございます。」に続けて二〇〇字以内で書きなさい。

(句読点も一字と数えます。)

※ かなづかいや表記を、わかりやすく改めてあります。

学者のアラムハラドはある年十一人の子を教えておりました。みんな立派なうちの子供らばかりでした。

王さまのすぐ下の裁判官の子もありましたし、農商の大臣の子もいました。また毎年じぶんの土地から十石の香油さえ穫る長者の一番目の子もいたのです。

けれども学者のアラムハラドは小さなセラバアドという子がすきでした。この子が何か答えるときは学者のアラムハラドはどこか非常に遠くの方の凍ったように寂かな蒼黒い空を感じるのです。それでもアラムハラドはそんなに偉い学者でしたから①えこ……などはしませんでした。

アラムハラドの塾はまちはずれの楊の林の中にありました。

みんなは毎日その石で畳んだねずみ色の床に座って、古くからの聖歌を暗誦したり、兆よりもっと大きな数まで数えたり、また数を互いに加えたり掛け合わせたりするのでした。それからいちばんおしまいは鳥や木や石やいろいろのことを習うのでした。

アラムハラドは長い白い着物を着て学者のしるしの垂れ布のついた帽子をかぶり、低い椅子に腰掛け、右手には長い鞭をもち、左手には本を支えながら、ゆっくりと教えて行くのでした。

……(中略)……

アラムハラドが言いました。

「火が燃えるときは焰をつくる。焰というものはよく見ていると奇体なものだ。それはいつでも動いている。動いているがやっぱり形もきまつている。その色はずいぶんさまざまだ。普通の焚火の焰なら、橙、色をしている。けれども、木により又その場所によっては、変に赤いこともあれば大へん黄色なこともある。硫黄を燃やせばちよつと眼のくるつとすような紫色の焰をあげる。それから銅を灼くときは孔雀石のような明るい青い火をつくる。こんなに色はさまざまだが、それはみんなある同じ性質をもっている。さつき言つたいつでも動いているということもそうだ。それは、火というものは、軽いものでもいつでも A」としている。それからそれは明るいものだ。硫黄のようなお日さまの光の中ではよくわからない焰でも、まっくらな所に持つて行けば立派にそこらを明るくする。火というものは、いつでも B」としているものだ。それからもう一つは熱いということだ。火ならばなんでも熱いものだ。それはいつでも C」としている。こういう工合に火には二つの性質がある。なぜそうなのか。それは火の性質だから仕方ない。そういう、熱いものかわかそうとするもの、光るもの照らそうとするもの、軽いものほろろとするもの、それを焰と呼ぶのだから仕方ない。

それからまたみんなは水をよく知っている。水もやっぱり火のようにちやんときまつた性質がある。それは物をつめたくする。どんなものでも水にあつてはつめたくなる。からだをあつい湯でふいても、かえつてあとではすずしくなる。夏に銅の壺に水を入れ壺の外側を水でぬらしたきで固くついで置かならば、きつとそれは冷えるのだ。なんべんもきれをとりにかえると、しまいにはまるで氷のようにさえる。このように水は物をつめたくする。又水はものをしめらすのだ。それから水はいつでも低い所へ下ろうとする。鉢の中に水を入れるなら、まもなくそれはしずかになる。\*阿耨達池やすべて\*葱嶺から南東の山の上の湖は多くは鏡のように青く平らだ。②なぜそう平らだかとならば、水はみんな下に下ろうとしてお互い下れるとこまで落ち着くからだ。波ができたら必ずそれがなおろうとする。それは波のあがつたとこが下ろうとするからだ。このように水をつめたいこと、しめらすこと、下に行こうとするのは、水の性質なのだ。どうしてそうかと言ふならば、それはそういう性質のものを水と呼ぶのだから仕方ない。

それからまたみんなは小鳥を知っている。鶯やみそささい、ひわや又かけすなど、からだ小さく大へん軽い。その飛ぶときはほんとうによく飛ぶ。枝から枝へうつるときはその羽をひらいたのさえわからなくらい早く、青空を向こうへ飛んで行くときは④一つのふるえる点のようだ。それほどこれらの鶯やひわなどは身軽でよく飛ぶ。また一生けん命に鳴く。うぐいすならば春にはつきり鳴く。みそささいならばからだをうごかすたびにうきうきと鳴いているのだ。

これらの鳥のたくさん鳴いている林の中へ行けば、まるで⑤雨が降っているようだ。おまえたちはみんな知っている。このように小さな鳥はよく飛びまたよく鳴くものだ。それは食べ物をとってしまつても鳴くのをやめない。またやすまない。どうして疲れないかと思ふほどよく飛びまたよく鳴くものだ。

そんならなぜ鳥は鳴くのか、また飛ぶのか。おまえたちにはわかるだろう。鳥はみな飛ぶにいられないで飛び、鳴かずにいられないで鳴く。それは生まれつきなのだ。さてこういふふうには火は熱く、かわかし、照らしのぼる、水はつめたく、しめらせ、下る、鳥は飛び、また鳴く。魚について獸についておまえたちはもうみんなその性質を考へることが出来る。けれども一体どうだろう、小鳥が鳴かないでいられず魚が泳がないでいられないように、人はどういふことが出来ないでいられないだろう。人が何としてもそうしないでいられないことは、一体どういふ事だろう。考えてごらん。」

アラムハラドはこう言つて堅く口を結び、十一人の子供らを見まわしました。子供らはみな一生けん命考えたのです。大人のように指をまけて唇にあてたり、まっすぐに床を見たりしました。その中で大臣の子のタルラが少し顔を赤くして口をまけてわらいました。

アラムハラドはすばやくそれを見て言いました。

「タルラ、答えてごらん。」

タルラは礼をして、それから少し工合わるそうに横の方を見ながら答えました。

「人は歩いたり物を言つたりいたします。」

アラムハラドがわらいました。

「よろしい。よくお前は答えた。全く人は歩かないでいられない。病気で永く床の上にいる人はどんなに歩きたいだろう。ああ、ただもう一度二本の足でびんびん歩いてあの\*楽地の中の泉まで行き、あの冷たい水を両手で掬つて呑むことができたら、そのまま死んでもかまわないと、こう思うだろう。またお前の答えたように、人は物を言わないでいられない。考えたことをみんな言わないでいることは大へんにつらいことなのだ。そのため病気にさへなるのだ。人が友だちをほしいのは、自分の考えたどんなことでもかかず話し、またかかず聴きたいからだ。だまつているということは本當につらいことなのだ。」

たしかに人は歩かないでいられない、また物を言わないでいられない。けれども人にはそれよりもっと大切なものがないだろうか。足や舌とも取りかえるほどもっと大切なものがないだろうか。むずかしいけれども考えてごらん。」

アラムハラドがこう言う間タルラは顔をまっ赤にしていましたが、おしまいは少し青ざめました。アラムハラドがすぐ言いました。

「タルラ、もう一度答えてごらん。お前はどんなものでもお前の足をとりかえないか。お前はどんなものでもお前の足をとりかえるのはいやなのか。」

タルラがまるで小さな獅子のように答えました。

「私は飢饉でみんなが死ぬとき、もし私の足が無くなることで飢饉がやむなら、足を切つても口惜しくありません。」

⑧アラムハラドはあぶなく涙をながしそうになりました。

「そうだ、おまえには歩くことよりも物を言うことよりもつれないでいられないことがあつた。よくそれがわかつた。それでこそ私の弟子なのだ。お前のお父さんは七年前の不作のとき、祭壇に上つて九日祈りつづけられた。お前のお父さんはみんなのために命も惜しくなかつたのだ。⑩ほかの人たちはどうだ。ブランダ。言つてごらん。」

ブランダと呼ばれた子はすばやくきちんとなつて答えました。

「人が歩くことよりも言うことよりもつれないでいられないのはいいことです。」

アラムハラドが言いました。

「そうだ。私がそう言おうと思つていた。すべて人は善いこと、正しいことをこのむ。善と正義のためならば命を棄てる人も多い。おまえたちはいままですういふ人たちの話をたくさん聞いて来た。決してこれを忘れてはいけない。人の正義を愛することは、ちよつと鳥のうたわらないでいられないと同じだ。セラバアド。お前は何か言いたいように見える。言つてごらん。」

小さなセラバアドは少しびびりつくりしたようでしたが、すぐ落ちついて答えました。

「人はほんとうのいいことが何だかを考えないでいられないと思います。」

アラムハラドはちよつと眼をつぶりました。眼をつぶつたらやみの中ではそこら中はおつと燦の火のように青く見え、ずうつと遠くが大へん青く明るくて、そこに黄金の葉をもつた立派な樹がぞろつとならんでさんさんさんと梢を鳴らしているように思つたのです。アラムハラドは眼をひらきました。子供らがじつとアラムハラドを見上げていました。アラムハラドは言いました。

「うん。そうだ。人はまことを求める。真理を求める。ほんとうの道を求めるのだ。人が道を求めないでいられないことは、ちよつと鳥の飛ばないでいられないとおなじだ。おまえたちはよくおぼえなければいけない。人は善を愛し道を求めないでいられない。それが人の性質だ。これをおまえたちは堅くおぼえてあとでも決して忘れてはいけない。おまえたちはみなこれから人生という非常なけわしいみちを歩かなければならない。たとえばそれは\*葱嶺の水や\*辛度の流れや\*流沙の火やでいっばいなようなものだ。そのどこを通るときも決して今の二つを忘れてはいけない。それはおまえたちを守る。それはいつもおまえたちを教える。決して忘れてはいけない。」

アラムハラドは礼をうけ自分もしずかに立ちあがりました。そして自分の室に帰る途中ふと又眼をつぶりました。さつきの美しい青い景色が又はつきりと見えました。そしてその中にはねのような軽い黄金いろの着物を着た人が四人まっすぐに立っているのを見ました。

アラムハラドは急いで眼をひらいて少し首をかたむけながら自分の室に入りました。

(宮澤賢治『学者アラムハラドの見た着物』より)

【注】 \*阿耨達池 ……古代インドの伝説に出てくる池。

\*葱嶺 ……中央アジア南東部の、海拔七〇〇〇メートル級の山々と高原から成る地域。

\*楽地 ……安らかな土地。楽土。

\*辛度の流れ ……インダス河。

\*流沙 ……広大な砂ばく。特にタクラマカン砂ばくのこと。

受験番号

問一	問二	問三	問四	問五	問六	問七	問八	問九	問十	問一	問二
		なぜそう		⑤	④	(2)	タルラが、			(2)	(3)
	A	}		(1)			}			(1)	(1)
	B			⑤							セララ
	C									ブランダ	(3)
							答えました。				(2)
											(1)

四	三	二
(1)	(1)	(1)
(2)	(2)	(2)
(3)	(3)	(2)
(4)	(4)	(3)
	(5)	

